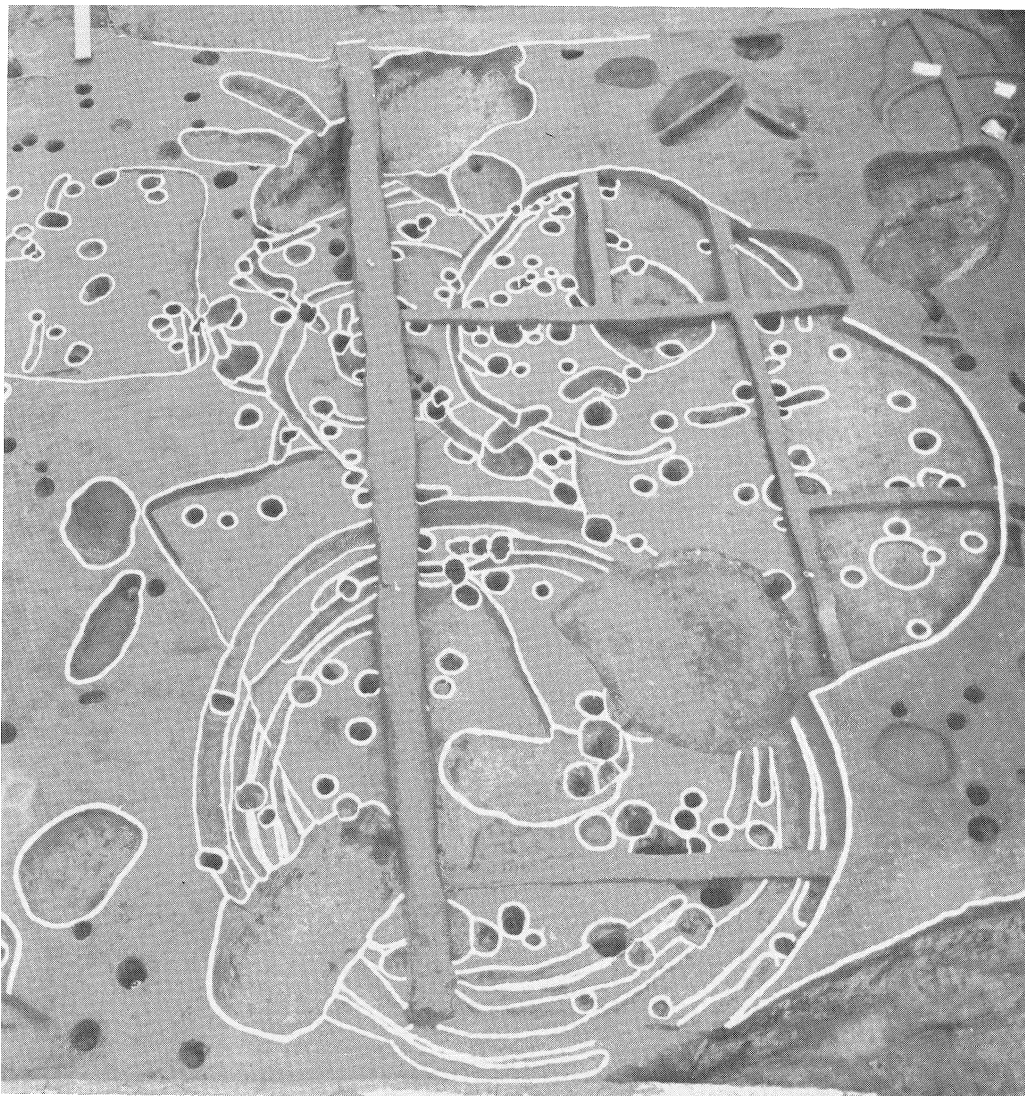


# 埋蔵文化財 愛知

No.5



## 弥生時代の住居跡（朝日遺跡）

中央の炉を中心として、同心円状に竪穴住居が広げられていった様子が見られる。（一番手前のもの、径約8メートル、4～5ページに関連記事記載。）

## 昭和六十一年度事業計画

### ●埋蔵文化財発掘調査及び報告書の刊行

名古屋環状2号線の建設を中心に、約40,200平方メートルの発掘調査と埋蔵文化財発掘調査報告書の作成を行います。

- 名古屋環状2号線関係 約32,100㎡  
(阿弥陀寺・土田・廻間・清洲)  
(城下町・朝日・十二飛遺跡)
- 五条川改修関係 約4,000㎡  
(清洲城下町遺跡)
- 福田川整備関係 約1,000㎡  
(阿弥陀寺遺跡)
- 国道151号線バイパス関係 約1,300㎡  
(杉山遺跡)
- 県道蒲郡碧南線関係 約250㎡  
(岡島遺跡)
- 勝川地区土地区画整理関係 約1,000㎡  
(勝川遺跡)
- 国鉄瀬戸線関係 約300㎡  
(勝川遺跡)
- 国道23号線岡崎バイパス関係 約250㎡

(岡島遺跡)

### ●発掘調査技術等研修会の開催

市町村の埋蔵文化財担当職員を対象とした研修会を開催します。

- 基礎研修会 3日間 募集人員 30名
- 専門研修会 2日間 募集人員 25名

### ●広報紙誌の発行

発掘調査の動向・情報をお知らせします。

- 「愛知県埋蔵文化財情報」の発行 年1回
- 「埋蔵文化財愛知」の発行 年4回

### ●埋蔵文化財展の開催

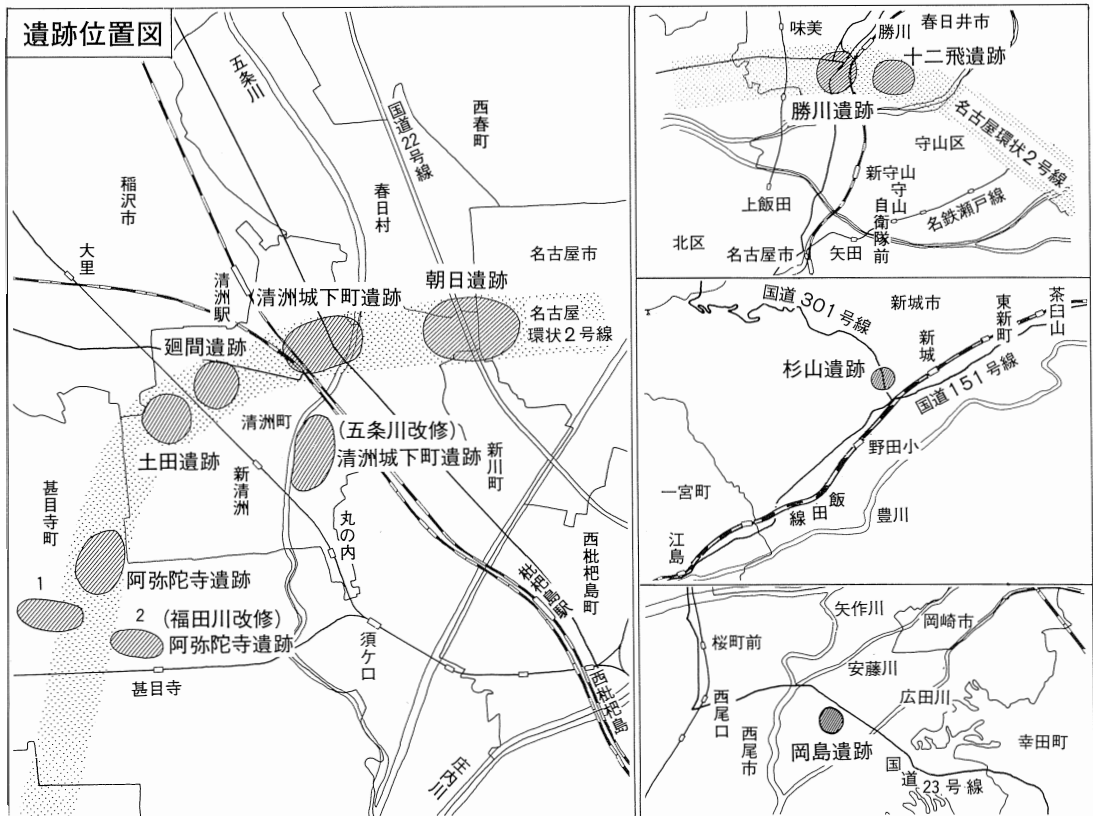
埋蔵文化財センターで発掘調査した出土品を尾張・三河の2会場で一般公開します。

- 尾張会場 清洲町民センター 9月上・中旬
- 三河会場 豊橋市美術博物館 8月下旬

### ●埋蔵文化財講演会の開催

学識者による講演会を埋蔵文化財展の期間中、尾張・三河の2会場で各々1回行います。

以上の事業を行うため9億1,987万5千円の子算を計上しております。



## 愛知県教育委員会実施の調査事業

県教育委員会は、遺跡の周知徹底を図り、開発事業との円滑な調整をすすめていくために、その基本的な資料作成事業として、関連市町村の協力のもとに次に掲げる調査を継続的に実施していく。

### (1) 愛知県内古窯跡群詳細分布調査事業

#### 一知多半島地域一

本事業は県内に所在する古窯跡の所在位置、現況等を把握し、分布図や台帳カード、報告書等の記録作成を行うもので、昭和52年度に開始して以来、すでに猿投山西南麓古窯跡群・尾北古窯跡群・三河地区古窯跡群・瀬戸古窯跡群・渥美古窯跡群について調査を完了してきた。

本年度および次年度は知多半島地域所在古窯跡について分布調査を実施する。調査は名古屋大学文学部檜崎彰一教授（当センター理事）の指導のもと、同助手斎藤孝正氏を調査主任とし、文化財課職員・同研究室学生・地元研究者により現地踏査をすすめるもので、調査結果については「愛知県古窯跡群分布調査報告（VI）」にまとめ、開発関連部局・研究機関等に配布し活用していただく予定である。

### 愛知県教育委員会文化財課

#### (2) 遺跡地図作成事業

遺跡の周知徹底は埋蔵文化財保護の基本であり、詳細かつ的確な遺跡地図の作成は保護行政をすすめる上で必要不可欠なことからである。

本県では昭和47年度に「愛知県遺跡分布図」を刊行して以来、発見された遺跡数も多数にのぼっているため、昭和59年度より遺跡地図改訂作業を実施している。この計画は、尾張・西三河・東三河の3地区に区分して、それぞれ2か年を要し3分冊の分布図を作成していくもので、昭和61・62年度は西三河地区分布図を作成する。

今回の遺跡地図では、現地踏査等に基づいて可能な限り遺跡範囲と所在地番とを明示するように努めるものとし、遺跡番号は市町村別の一連番号で表示していく。遺跡表示記号は文化庁発行の全国遺跡地図のものを踏襲し、加えて国・県・市町村指定史跡・名勝・天然記念物についても登載対象とする。また完全に滅失した遺跡についても、残存するものとは表示色を区別して記載する。

こうした遺跡の周知作業は県のみが行うことではなく、同様に市町村もすすめていくべき業務である。このため、各市町村におかれても、今回の趣旨を十分に理解されて管内遺跡地図作成に努められることを期待したい。

## お ・ 知 ・ ら ・ せ

### 埋蔵文化財展・埋蔵文化財講演会の開催

本センターは、その前身であった教育サービスセンター埋蔵文化財調査部以来、数多くの遺跡の発掘調査をしてきました。今まで発見されてきた遺物の中から約500点を選び、今回、下記のように埋蔵文化財展を催します。また、期間中各会場において1度ずつ埋蔵文化財講演会を催します。多数の御来場をお待ちします。

なお、埋蔵文化財展、講演会ともに入場は無料です。（照会先 ☎052-409-6021（調査課））

#### <三河会場>

○ 8月20日(水)～31日(日) 豊橋市美術博物館  
（8月23日(土)午後1時30分から講演会）  
（8月25日(月)休館）

#### <尾張会場>

○ 9月7日(日)～14日(日) 清洲町民センター  
（9月14日(日)午後1時30分から講演会）  
（9月8日(月)休館）

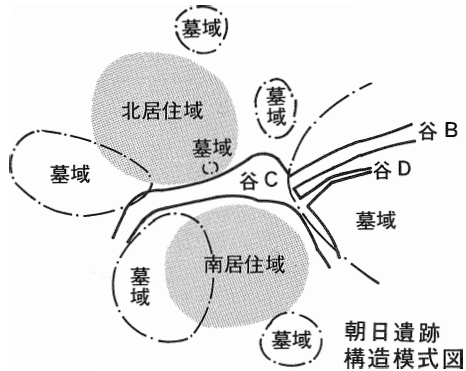
シリーズ 朝日遺跡を語る

## 住 居 と 墓

### 朝日遺跡の全体像

朝日遺跡は、弥生時代前期から古墳時代前期にわたる尾張平野部最大の集落遺跡であり、その推定面積は70万㎡にも及ぶ。地形的には、旧五条川を含む古木曾川支流が形成した微高地を中心に展開し、最高所での標高は2mを測る。

ほぼ東西にのびる微高地は、谷Cによって大きく南北の2地区の分割され、それぞれ居住域となっている。墓域は中核が東西に設定されている。現在までのところ水田跡は未確認である。



### 住居のかたちと大きさ

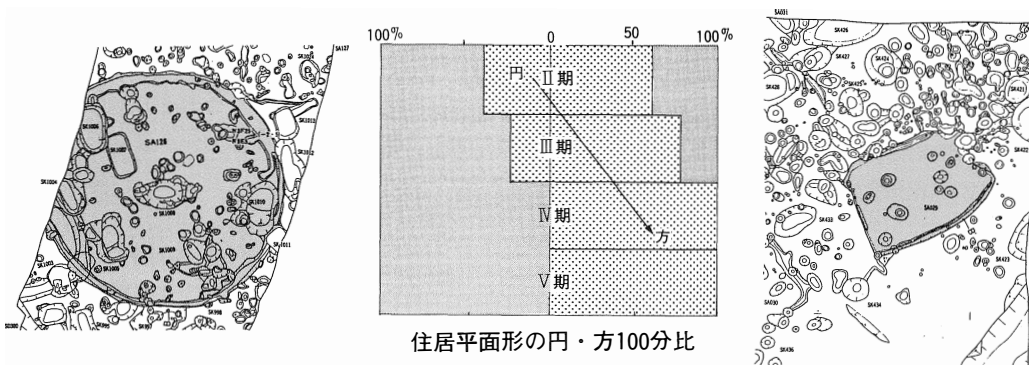
住居は竪穴住居が一般的で、平面形は（長）方形あるいは円形をなす。掘立柱建物は僅かしか検出されていない。

（長）方形の竪穴住居は、1辺3mから7mを測るものが普通で、10mを越えるものは未検

出である。だいたいが主柱4本からなり、壁際には幅5cm～10cmの小溝がめぐる。床面には貼床がなされ、炉は長軸線上を一方に偏った位置に焼土面としてあるのみで、石囲い等の施設はみられない。弥生時代後期の（長）方形竪穴住居には一辺の中央付近壁際に馬蹄形周堤遺構をめぐらす土坑を有するものもある。

円形の竪穴住居は、径3.5mから10m弱を測るものまでであるが、7m前後のものが多い。主柱は6本が普通で、小規模なものになると4本あるいは2本となる。壁際には幅5cm～10cmの小溝がめぐる。床面には貼床がなされ、炉は床面のほぼ中央付近に浅い土坑を掘り込んでつくられており、内部には炭化物、灰が充満している。円形竪穴住居の場合は、（長）方形竪穴住居と異なり床面を拡張したものが多く、本来壁際の小溝であったものが同心円状に残っている。このことは円形竪穴住居の位置が固定されていたことを示している。

両者の比率を時期的な変遷でみると、弥生時代中期中頃（Ⅲ期）まで円形竪穴住居が20%以上を占めていたのが、それ以降になると（長）方形竪穴住居のみとなる。中央に炉穴をもつ円形竪穴住居は西日本の様相を示すものであり、その分布と消長を探ることは朝日遺跡を理解する上で重要である。



方形周溝墓のかたちと大きさ

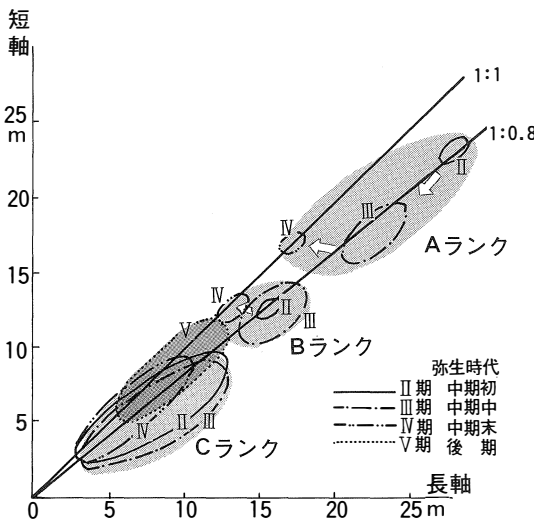
方形周溝墓は溝の切れ目（陸橋部と呼ぶ）の数によっていくつかに分ける。陸橋部のないものをA<sub>0</sub>とし、四隅のどこかに陸橋部があるもののうち1箇所〈A<sub>1</sub>〉～4箇所〈A<sub>4</sub>〉の4つに分ける。一辺の中央に陸橋部があるものをBとするが、朝日遺跡では未確認である。

時期別で見ると、弥生時代中期中頃（Ⅲ期）まではA<sub>4</sub>が80%以上を占めるが、同期末頃にはA<sub>1</sub>が60%近くを占め、A<sub>4</sub>は半数以下となる。弥生時代後期（Ⅴ、Ⅵ期）にはA<sub>4</sub>は消滅し、A<sub>2</sub>が90%近くを占めるようになる。A<sub>1</sub>は27%と少ないが、他遺跡の状況を見るとA<sub>2</sub>と同程度は存在している可能性がある。平面形は、Ⅱ、Ⅲ期は長方形が主体を占め、中期末（Ⅳ期）以降は正方形が主体を占めるようになる。

方形周溝墓の墓の規模は、分布の集中部分と空白部分からみてⅣ期までは1辺10m以下：Cランク、12～16m：Bランク、18m以上：Aランクの3グループに区分できるが、Ⅴ期以降は一辺5～12mに収れんされる。面積比で見ると、

	A <sub>0</sub>	A <sub>1</sub>	A <sub>2</sub>	A <sub>3</sub>	A <sub>4</sub>
Ⅱ期	0	3	6	1	45
Ⅲ期	0	2	0	1	24
Ⅳ期	0	4	7	0	3
Ⅴ期	1	3	0	0	0
Ⅵ期	0	0	?	0	0

方形周溝墓形態別度数分布表



方形周溝墓台状部規模分布図

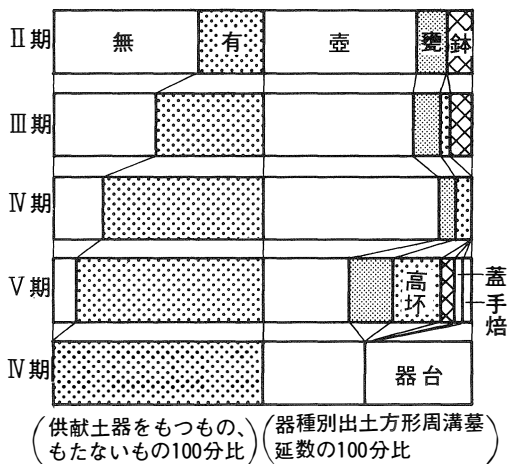
最も較差の大きいのはⅡ期の1：44、小さいのはⅤ期の1：4となる。規模の大小が何を表示するのかは判断の難しいところであるが、弥生時代中期末(Ⅳ期)を境にして大きく変化する点には要注意である。

副葬品と供献品

方形周溝墓に副葬品が伴うようになるのは弥生時代後期（Ⅴ期）になってからで、規模較差の縮小する時期に相当する点は重要である。つまり、弥生時代中期（Ⅱ～Ⅳ期）は規模による較差の表示が中心であったのが、弥生時代後期（Ⅴ期）は副葬品による較差の表示が中心となったことを示しているようだからである。ガラス小玉120個を出土したものがあるかと思えば、ガラス小玉あるいは管玉を数個か全く副葬品をもたないものもあるというように、規模較差の小さいわりには内容の較差は一見大きい。

以上のような変化は土器を中心とする供献品にもみられる。弥生時代後期には壺の比率が半数以下に低下し他器種の増加をみるとともに、全個体数も増加をみ、60点以上の供献土器をもつものも出現する。ここで付け加えておけば、屍体の埋葬方式も弥生時代中期には屈葬中心であったのが、後期には伸葬葬がみられるようになる。しかし、これまでのところ残念ながら棺の有無及び構造、数、配置についての傾向を確言できる程の資料は入手できていない。

(石黒立人)



(供献土器をもつもの、もたないもの100分比) (器種別出土方形周溝墓延数の100分比)

市町村だより

## 柘 山 遺 跡

半田市教育委員会

ひいらぎやま

柘山遺跡は半田市柘山1丁目、寛良寺の東側、柘山の中腹にあって、石仏が建立されている。高さ約60cmの定印を結んだ阿弥陀如来の座像である。その台座の正面から側面にかけて銘文が刻まれ、石仏建立の経緯を伝えている。「…安永七戊戌四月十日当村或瓶掘出内白骨一杯与有一錢其時節者以古錢鑑年凡七百廿六年也…」。

附近一帯が公園化されるに伴って石仏を一時他へ仮安置し、基盤を整地した際、銘文にあるように石仏の下から、内部に土砂を混じ、破碎された白骨を充滿した大甕と、その上部を覆うように別個体の甕の破片が出土した。発見された状況と、台座の銘文から、安永7年(1778)に発見された際に甕が破損していたため、新しい甕に埋納し直して、古い甕を上部に置き石仏を建立したと解される。このことは上部の甕の破片の内部にも骨片を混じた土が固く附着していたことからもうかがえる。上部の甕は耕作のた

めか口縁部を失っており、その製作年代を特定することは困難であるが、印花文は常滑市高坂古窯跡群<sup>(1)</sup>のそれに近く、全体が還元焔で焼成されていることなどから、知多地方行基焼編年上第3型式に属するものと考えられる。銘文中の古銭は今回発見されなかったが、北宋の至和元宝(1054)と思われる。これらのことから、14世紀後葉の頃、甕の中に洗骨を入れた最初の埋納がなされたといえよう。骨は歯牙などから人骨と思われるが、数体分にも及ぶ人骨の二次埋葬の蔵骨容器として大甕が使用された一例として提示したい。

注1「常滑市誌文化財篇」737P史跡考古資料

「半田市誌資料篇Ⅱ」137P半田市内の知多窯

(半田市立博物館館長 立松 宏)



## 高 木 遺 跡

岡崎市教育委員会

本遺跡は、岡崎市南部、旧占部川沿いの中段段丘(碧海面)上に立地し、谷を挟み北の文女遺跡(弥生時代末～古墳時代初頭)南の神明遺跡(縄文時代晩期土器棺墓群、古墳時代集落跡)と伴に駅西遺跡群を形成している。

昭和52年から大規模な区画整理事業が開始されたため、54年度の試掘調査以降、本調査を実施し、60年度の調査をもって5次約5000㎡に及ぶ調査を終了した。

この結果、竪穴住居跡72軒、方形周溝墓14基、掘立柱建物1棟、土坑等の遺構が検出されている。また、遺物包含層中からは、縄文時代後期から中世にかけての遺物が出土している。

竪穴住居跡は、弥生時代後期末から古墳時代全般にかけてのもので、特に古墳時代前期(4・5世紀)を主体としている。この集落の前縁を

とり囲む形で古墳時代前期の方形周溝墓群があり、弥生時代中期の一群は、南西部に墓域をなしている。掘立柱建物は、4×5間で、古墳時代に属すると考えられる。土坑中には、水神平・遠賀川両型式の土器が共伴するもの(IC-7)もある。

この様に本遺跡では、集落の全様が判明しつつあるが、今後の遺物整理等により、集落内の構造、集落と墓域の関連、西三河における土器編年などの諸問題についての糸口が開かれるものと思われる。

(社会教育課主事 荒井信貴)



## 愛知県埋蔵文化財担当専門職員名簿（昭和61年5月1日現在）

県市町村名	所 属	電 話		県市町村名	所 属	電 話	
		職 名	氏 名			職 名	氏 名
愛知県	教育委員会文化財課	<052>961-2111				学芸員	野澤則幸
		主 任	赤羽一郎			〃	伊藤正人
		教育主事	中川真文			〃	服部哲也
		〃	遠藤才文			〃	竹内宇哲
愛知県	陶磁資料館	<0561>84-7474				〃	伊藤厚史
		学芸課長	柴垣勇夫			〃	千田嘉博
		学芸員	浅田員由			〃	野口泰子
		〃	仲野泰裕			〃	水野裕之
		〃	井上喜久男	一宮市	博物館建設準備局	<0586>72-2343	
		〃	野末浩之			局長	岩野見司
名古屋市	教育委員会文化課	<052>961-1111				主 事	土本典生
		学芸員	小島一夫	瀬戸市	歴史民俗資料館	<0561>82-0687	
		〃	山田鉦一			館 長	宮石宗弘
豊橋市	教育委員会美術博物館	<0532>51-2621				学芸員	藤澤良祐
		主 事	朝倉美典				
		主事補	贅元洋				
		〃	小林久彦				
岡崎市	教育委員会社会教育課	<0564>23-6439					
	市史編纂室	主 事	荒井信貴	半田市	市立博物館	<0569>23-7173	
		嘱 託	川崎みどり			館 長	立松宏
		〃	木村光一			学芸員	近藤英正
豊川市	教育委員会社会教育課	<05338>5-2111		豊田市	郷土資料館	<0565>32-6561	
		主 事	前田清彦			主 査	松井孝宗
豊田市	教育委員会社会教育課	<0565>31-1212		蒲郡市	郷土資料館	<0533>68-1881	
		副主幹	田端勉			学芸員	小笠原久和
		主 査	伊藤達也	常滑市	民俗資料館	<05693>4-5290	
西尾市	教育委員会社会教育課	<0563>56-2111				学芸員	中野晴久
		主 事	松井直樹	尾西市	歴史民俗資料館	<0586>62-9711	
小牧市	教育委員会社会教育課	<0568>72-2101				学芸員	伊藤和彦
		主 事	中嶋隆	大府市	歴史民俗資料館	<0562>48-1809	
稲沢市	教育委員会社会教育課	<0587>32-1111				社会教育指導員	加藤岩蔵
		主 事	北條献示	知多市	民俗資料館	<0562>33-1571	
		文化財調査員	日野幸治			館 長	杉崎章
新城市	教育委員会社会教育課	<05362>3-1111		清洲町	貝殻山貝塚資料館	<052>409-1467	
		主 事	夏目勝雄			主 任	高橋信明
東海市	教育委員会社会教育課	<052>603-2211		武豊町	歴史民俗資料館	<0569>73-4100	
		主 査	立松彰			館 長	磯部幸男
知立市	教育委員会社会教育課	<0566>83-1111				学芸員補	奥川弘成
		主事補	岡本茂史	三好町	町立歴史民俗資料館	<05613>4-5000	
		埋蔵文化財調査員	鶴田真佐子			館 長	安田幸市
一宮町	教育委員会	<053393>3111		足助町	足助資料館	<0565>62-0387	
		主事補	須川勝以			館 長	鈴木茂夫
名古屋市	見晴台考古資料館	<052>823-3200				職 員	鈴木昭彦
		学芸員	平出紀男	設楽町	町立奥三河郷土館	<05366>2-1440	
		〃	木村有作			館 長	鈴木富美夫

## 愛知県埋蔵文化財センター

## 名簿一覧

<b>役員</b>		<b>職員</b>	
<b>理事長</b>		事務局長(常務理事兼) 中林 茂	
小金 潔	(県教育長)	<b>管理課</b>	
<b>常務理事</b>		課長 斎藤 樹三	
中林 茂	(兼事務局長)	主査 青山 光一	
<b>理事</b>		主事 森 信孔 田上 堅三	
井関弘太郎	名古屋大学教授	小倉 晴美	
伊藤 秋男	南山大学教授	<b>調査課</b>	
大参 義一	信州大学教授	課長 橋本 雅司	
坪井 清足	(財)大阪文化財センター理事長	課長補佐兼主査 竹内 尚武	
檜崎 彰一	名古屋大学教授	主事 浅井 和宏	
三浦 小春	中日新聞嘱託	嘱託 菅沼 良則	
花木 薦雄	都市教育長会会長(一宮市教育長)	主査 梅本 博志	
伊藤 芳	蟹江町教育長	主事 小澤 一弘 水谷 朋和	
大橋 雄六	県土木部長	細野 正俊	
中神 秀雄	県教育委員会社会教育部長	嘱託 中野 良法	
林 正治	清洲貝殻山貝塚資料館長(清洲町長)	主査 山田 耕治	
日下 英之	県陶磁資料館館長	主事 平田 睦美 酒井 俊彦	
<b>監事</b>		池本 正明	
石原 坂男	県出納事務局長	嘱託 長島 広	
田中 隆三	県教育委員会総務課長	課長補佐兼主査 清水 雷太郎	
<b>専門委員</b>		主事 赤塚 次郎	
考古学	檜崎 彰一 名古屋大学教授	嘱託 松原 隆治	
文献史学	早川 庄八 名古屋大学教授	主査 鷺野 勉	
地理学	井関弘太郎 名古屋大学教授	主事 土屋 利男 石黒 立人	
建築史学	浅野 清 愛知工業大学教授	佐藤 公保	
動・植物学	渡辺 誠 名古屋大学助教授	嘱託 丹羽 博	
形質人類学	池田 次郎 岡山理科大学教授	主査 梅村 清春	
保存科学	江本 義理 東京国立文化財研究所 保存科学部長	主事 平野 清 宮腰 健司	
		嘱託 松田 訓	

(昭和61年4月1日現在)

## セ ン タ ー 一 日 誌

- 記 録**
- 4/3 発掘作業開始
- 4/7 整理作業開始
- 5/20 岡山理科大学 池田次郎教授, 朝日遺跡出土の人骨鑑定のため来所

## 人 事 異 動

- 稲垣隆一 豊田教育事務所へ
- 伊藤義幸 愛知県教育委員会福利課へ
- 遠藤才文 愛知県教育委員会文化財課へ
- 金原 宏 刈谷市立刈谷南中学校へ

- 上部 肇 津島市立藤浪中学校へ
- 安藤義弘 愛知県立春日井南高等学校へ  
(4月1日付)

## 埋蔵文化財愛知 No.5

発行 昭和61年6月  
編集 (財)愛知県埋蔵文化財センター  
〒450 名古屋市中村区名駅二丁目44番5号  
名駅パークビル9F  
TEL 052-586-3155  
印刷 東海プリント